

VISIONS

■1994年7月23日発行 ■年4回発行3,000円(送料込) 単価500円

●無断転載はご遠慮下さい。

AWAC ニュースレター 3号
ASIAN WOMEN AND ART COLLECTIVE
発行所 〒156 東京都世田谷区桜丘4-16-2 富山方 Tel・Fax 03-3425-6095



特集 女から 近代への問い

1921年、ロシア・アヴァンギャルドの女性
画家によるコスチューム・デザインの復元
(本文P10~11)

AWACセミナー 第4期 開催中 毎月第4土曜日

フェミニズムの思想と創造のために—— 女から・アートへの視座

※8月は夏休みです

- 6月25日(土) PM5:00~9:00
音楽における性差別・オペラ台本をめぐって
■小林 緑(音楽学 国立音楽大学教員)
- 7月23日(土) PM5:30~9:00
女性アーティストと日本美術界
■深澤 純子(美術と女性・日本女性学会会員)
- 9月24日(土) PM5:30~9:00
アートと行政—市民の税金で女性ヌード彫刻をなぜ買うか
■西山 千恵子(フェミニズムと芸術・日本女性学会会員)
- 10月22日(土) PM5:30~9:00
美術館・美術展の政治学—80年代の新しい風
■萩原 弘子(芸術思想史・大阪女子大学教員)
- 11月26日(土) PM5:30~9:00
ドイツ・アヴァンギャルドの女性画家
■香川 檻(ドイツ文化史・美術史・女性史)

■セミナー参加者を募ります。

参加費 1期5回分・1万円を前納して頂きます。
(飲み物と軽食つき)

会場 喫茶店 版(ばん) 新宿区四ツ谷1-7 装美ビル1F
TEL.3358-7922 担当:有賀章子

JR・地下鉄四谷駅3分(地図参照)

時間 午後5時半~9時

定員 30名(参加者がテーマについて十分討議できるために少なくしました)

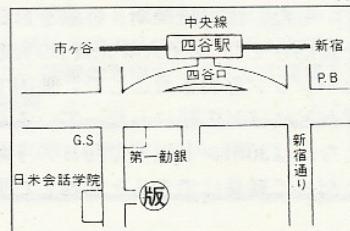
申込 住所氏名などお書き込みのうえ、郵送してください。

会費は郵便振替をご利用ください。

送り先 〒156 東京都世田谷区桜丘4-16-2 富山方

Tel・Fax(03)3425-6095

郵便振替: 00130-4-759636 AWACネットワーク



女から・近代への問い

女にとって近代とはどうであったか。女性は人権宣言の対象ではなかった——ドイツ、フランス、そして植民地となったアジアに視点をあててみました。

1 近代・追われゆく女たち —ユダヤ人のばあい

田村雲供

1968年以後の第2波フェミニズム運動の最大の成果は「家事労働」の発見だと言われた。これは女の労働市場への参入を阻むためのシーマ「男は外、女は内」にもとづく「内」の探究の成果であり、ひいては19世紀の第一波フェミニズム運動の地平の延長線上にある思考パターンの帰結でもあった。つまりブルジョア市民女性の規範像である妻・母・主婦の世界にかかる関心であり、一国資本主義の相貌のもとにおさめられる視点である。したがって、この家事労働から帝国主義も超国家システムも見えてこなかった。

市民層の女性と同じく家内に取りこまれていながら妻・母・主婦とは無縁の女たちがいた。「女中」である。彼女らは住みこんだ家の家族員に「快適」というサービスを提供するため額に汗して働くのであるが、家族という親密圏にあって徹底的な「他者」である。他者であるかぎり家族からの排除は容易である。女中の平均就務期間は7~10ヶ月と短く、彼女らは際限のないサービスの要求にたいし、転々と家族と家族のあいだを渡りあるいは自己防衛をはたしつつ、ついには夜の街に立つ。

1900年ベルリンの風紀警察の取り締りで補導された売春婦のうち60%が、かつてベルリンで女中として働いていた女性であった。また、ミュンヒエン警察の取り締りでも、売春婦がかつて就いていた職業の筆頭に女中がきている。さらに全婚外子(私生児、非嫡出子)の三分の一は女中であった女性が産んでいる。ベルリンでの私生児出産率の筆頭を占めている職業も女中である。夫なくして子を身ごもった女は、お上品ぶることを美德と信じていたブルジョア市民家族にあっては何よりの恥辱であった。たとえ妊娠の相手がその家の戸主であり息子であっても、女中は去らなければならない。

女たちは夜の街に出ただけではなかった。さらに海を渡ってヴェノスアイレスやアレキサンドリアへ、そしてアフリカへと出ていった。世紀転換期、啓蒙を自認する文明國の人びとを震撼させた「女子人身売買」の実態は、さまざまなセンセーションを引きおこした。英國では若い女性の人身売買がどれほど広範にわたっているかを、またその気にさえなれば30ポンド以下で10日のうちに9人の女を買うことだって容易にできると暴露した男性記

者が、記事の内容によってではなく、こうした内容の記事を赤裸々に公表したがために嵐のような抗議を受けるはめになった。

女子人身売買の実態暴露はお上品な市民層の人びとのひん蹙をかかったのであるが、同時にあらたな側面を明らかにした。つまり、この人身売買には多くの東方ユダヤ女性が売買の対象になっていたことである。ガリツィア地方の「空気人間」といわれた極貧のユダヤ人家族を訪れた仲介業者の女衒は労苦なくして娘を連れ出した。女たちはいくつかの中継地を経て、その容貌に応じて上質のワインとか、あるいはジャガイモといった隠語で取り引きされた。紐帯の緊密さが強調されるユダヤ人家族であるが、それは経済的基盤の保証を前提としていた。女衒もその大多数がユダヤ人であり、かれらは国際組織をはりめぐらし、奴隸貿易などの「女貿易」を営んだ。莫大な利益を手にしたユダヤ人は、ふんだんに黄金をつかったシナゴーグを建てユダヤ教の慣習を遵守した。

もちろん、女子人身売買反対闘争が組織された。この闘争は、第一次世界大戦後は国際連盟に活動の場が移されるのであるが、大戦勃発までは各国別の闘争が組まれていた。しかも男性が運動の中核を占めていた。この頃、ときを同じくして各国では売春婦規制反対闘争が女性たちによって展開されていたが、この闘争に男性の姿はほとんどみられなかった。同根の二現像である人身売買と売春であるにもかかわらず、男たちは売春という直接性を避け、正義の代表者面をして「いたいけな少女を守る」と吹聴した。しかし国家をもたないユダヤ人の場合、運動はユダヤ最大の慈善団体「ブナイ・ブリス」と「ユダヤ人女性団体連合」が担ったが、人身売買に多くのユダヤ人が関与している事実の強調と、たえざる反ユダヤ主義の台頭のもとで、男たちはこの運動の继续に危険性をかけ身を引いてゆく。女性だけが運動をつづけた。後に、やはりナチズムは、「ユダヤ人は女衒で、売春婦だ!」という決めつけをおこなうことになる。

労働市場から締め出された若い女性や女中職にあったものがたどったもう一つの道は帝国植民地に通じるものであった。帝国植民者と女性団体「植民地女性連合」は、男性単身入植者のための妻として植民地での過酷な労働に耐えうる頑健な体格の女性を募った。入植の促進と同時に民族の純血をまもる、つまり労働と純血の保証を同時に実現できるのは女性のみであったのだから。混血児の増加という絶望をくい止めることができるのは女である。



女たちは見知らぬ男性の妻となるべく海を渡ったのであるが、しかし植民地で妻の座をえることによって、祖国ではあじわったことのない優越感を享受することになる。彼女らは先住民に命令し、こき使い、蔑んだ。かつて女中であった頃、ブルジョア市民の妻たちが彼女らにしたようだ。

その一方で、色の黒い先住民の女性は白人女性の権力を背にしたゆえの自尊心をくすぐっただけではなく、白人男性の安易な快楽の対象ともなった。とくに先住民の反乱(南西アフリカ=現ナミビアでのヘレロ人、ナマ人の

2

200年前の洞察・「女権宣言」 —パリジエンヌとは誰か—

林 瑞枝

「人は、自由かつ平等なものとして生れ、生きる」。フランス大革命の「人権宣言」がかかけたこの言葉は、フランスの誇りであるだけでなく、人権の普遍的な理念として世界に広がった。この理念が重要であることは、だれもが認めるにやぶさかでないだろう。

だが、1970年前後からフェミニズムが高揚するなかで、フランスでは疑いが広まった。この「人」にはたして女が入っていたろうか——。70年という時点では、フランスの女性は少なくとも法的にはまだまだ〈解放前〉だった。自分たちの地位を見つめながら、かの大革命が女を置き去りにしていた事実をあらためて認識することになったのである。この頃から、平等化の法改正は85年にかけて一段とすんだが、それでも1981年に誕生した「女性の権利省」はその広報誌に『完全な女性市民』という題をつけて人々の自覚を促さなければならなかった。

けれど、革命時にすでに「人権宣言」の女性にとっての限界を察知し、それを明確に指摘していた女性がいた。オランプ・ドゥ・ゲージュである。彼女は人権宣言の「人」を「女性」に置きかえて痛烈な『女性および女性市民の諸権利の宣言』を書いた(これについてはすでに、辻村みよ子、西川祐子両氏の翻訳と優れた論評がある)。女が表舞台にたつのを嫌っていた時代に、このような思い切った文書を公けにする内発的な力をもっていたこと自体が驚異だが、それにもまして問題の本質を見抜く洞察力に感嘆せられる。

ゲージュは何を要求していたのか。そのいくつかを挙げてみよう。

一女も主権をもつ国民である。したがって市民権をもち、人民の代表者になる資格がある。その代表者をとおして女性の法律の形成に協力しなければならない[人権宣言ではこれらの権利は資産を有する男性にかぎられる]。国民を構成する者の多数が憲法の作成に加わらなければ、憲法も無効である。

—法律のまえに男女は平等であり、能力にしたがって等しくすべての公の位階、地位、職に就くことができな

反乱)が鎮圧されたあと8000人からの駐屯兵士による先住民女性への暴行は、性病の蔓延と人口の減少をきたすまでになり、まさに「性の植民地」を展開した。

ドイツとは異なって、英國では過剰となった「ガヴァネス(女家庭教師)」を需要の見通しもないまま植民地に送りだし、フランスでは「マノン・レスコー」よろしく売春婦を植民地にはき捨てた。彼女らはもはや「商品」でもなんでもなかった。身体・性の商品化も過剰はダンピングである。

ければならない。[人権宣言の表現は男女ではなく「市民は…できる」だが、女性は革命期はもとより、その後も市民の権利は与えられなかった]。

一意見表明の自由。法律が定める公の秩序を乱さないかぎり、と人権宣言と同様に権力をめているが、思想・意見の自由な伝達となるとゲージュの本領が表われる。この自由が女性市民にとってとくに重要なのは、この子の父はあなただ、といえることなのである。父の検索が、以後もずっと禁じられ続けた事態に変りはなかったが。

一権利を主張する以上、租税をはじめすべての義務は果たし、処罰にも服す。「女性は処刑台にのぼる権利がある。同じく演壇にのぼる権利をもたなければならない」のだ。

いま思えば、みな人権の理念から当然にでてくる結論にすぎない。けれど、もっとも市民革命の理念を徹底させた政府は、ゲージュを処刑台に送った。「己の性の尊厳を忘れたために罰せられた」と時の政府機関紙は解説した。ゲージュは公序を乱したのである。

1970年、彼女の要求はまだ叶えられていなかった。

1994年、フランスはゲージュが予測した現象に当面している。「女権宣言」の最後には〈男と女の社会契約〉という一文があったが、そのなかで、自由な結婚についてこう述べられている。それは、おのおのの意志に基づき、命と愛情が続くかぎりの共同生活で、財産を共有する。生れる子どもは「どの床から生れようと」財産の分与に差別されず、父母どちらの氏を名乗ってもよい。ここでは法律婚を超越し、嫡出子・非嫡出子の別なく、氏の不平等もない。80年代後半からのフランスも婚姻の脱制度化が著しい。ゲージュが思い描いた〈自由婚〉が珍しくなく、出生する子の30%は婚外子である。だが、これもいまや家族のありかたの一つにすぎない。

現在の日本との関係で考えるならば、ゲージュの「自分の血をひく子を否認することを罰する法律」の要求、父の責任の要請に注目したい。

フランスでも女性の諸権利は保障され、家族形態の多様化があたりまえになった。けれど、昨今、婚姻についてあらためて「一夫一婦制」がフランス社会にとって公序



であるとの主張がみられる。その結果、1993年から、一夫多妻は、フランスでの長期滞在許可が認められなくなった。フランスのフェミニストはそれを当然としている。

3 母性礼賛の呪縛を越えて —ドイツのある母と娘の物語—

松下たゑ子

エリザベート・ランゲッサーという作家が今ドイツで話題になっています。彼女の作品のためと言うよりも、スキャンダラスな興味に支えられた関心という面もあります。我が娘をナチスに「売った」母という汚名を巡るものです。

ランゲッサー(1899~1950)は、戦後の一時期脚光を浴びたカトリックの作家です。国内亡命のもっとも重要な作品に数えられる小説、救済の寓話を書いたとされています。

この女性の作家の戦前の作品のなかに『プロセルピナ』と言う小説があります。《幼年時代の神話》という副題を持つこの作品は1929年に書かれたのですが、実際に発表されたのは1949年でした。しかし1933年《ある子どもの世界》という副題で、改定版が出版されました。ナチスの検閲を逃るために表現を和らげた作品です。これは当局の取り締まりにより行われたというより、ランゲッサーの自己検閲とも言うべき改訂でした。たしかに『プロセルピナ』は危ない作品でした。筋らしい筋もないこの小説には、病弱な少女の変化に乏しい日常と、その分豊かな幻想の世界が描かれているのですが、そこ出てくる母が問題なのです。少女プロセルピナの幻想になかに現れる母は、厳しい、破壊的な、死をもたらす、魔女のような、お化けのような母なのです。

母はナチスの聖域でした。母性こそ女性の特性であり、理想であるとされ、母を讃える社会的行事が繰り広げられ、文学でも母は主要なテーマとなりました。しかし母性礼讃、母親敬愛の文化はナチス以前から、ドイツに深く根ざしていました。19世紀末から今世紀初頭にドイツでは多くの女性の作家が生まれ、女性の生活のなかに文学のテーマを求め、また自らの新しい生き方を模索していましたが、その中に描かれた母と娘の関係は、たとえ調和を欠くものであったにせよ、母親を鋭く批判したり、糾弾したりするものではありませんでした。母と娘の葛藤は世代間や社会的葛藤として捉えられるよりも、個別の性格の相違によるものとされました。父と息子の葛藤は、社会的にもまた心理学の世界でも既に一つの事実として扱われていたにもかかわらず、母と娘は一体的存在でなくてはならなかったのです。そういう背景のなかでは、ランゲッサーの作品は新しい視点を拓いたものと言えますが、彼女はナチスにより組織されたドイツ文芸院を追われ、執筆禁止になります。発表した作品のためではありませんでした。彼女の父親がユダヤ人であったた

人の頻繁な国際間移動がふつうになり、固有の文化がたがいに摩擦を起こしかねない今日、境界を超えて洞察すべきは何なのだろうか。

めです。

1984年、一冊の本がスエーデン語で書かれ、それからドイツ語に訳されました。コルネリア・エドヴァルドソンという女性の『ユダヤの星を背負いて』という



本です。14才でナチスにより、両親と引き離され、アウシュヴィッツに送られた少女が生き延びて、戦後スエーデンに送られ、重い病気から回復し、結婚し、子をもうけ、自己のアイデンティティを求めてイスラエルに渡るまでの伝記小説です。文体は推敲を重ね、工夫をこらした作品ですが、登場人物は全部実名です。コルネリア・エドヴァルドソンの母の名はエリザベート・ランゲッサーでした。ランゲッサーは妻子あるユダヤ人の男性と恋をし、コルネリアという娘を生みました。ナチスの用語で言うとコルネリアは4分の3のユダヤ人ということになります。その後その娘をつれて、ドイツ人と結婚し、さらに3人の娘を得ました。コルネリアはゲスタボに呼ばれ、黄色いユダヤの星を付けることを強要されます。ランゲッサーの尽力でコルネリアはスペイン国籍を得ていましたので、ドイツの法律に従わねばならないことはないとコルネリアが主張すると、それならば、母親であるランゲッサーにその責任を取ってもらわねばならぬとゲスタボの役人は言いました。つまり、収容所へ送られるのは、娘か母かという選択を迫られたわけです。娘に付き添って来ていたランゲッサーはその時無言でした。娘はその沈黙の意味を一瞬のうちに「理解」し、母の自由を守り、自らが強制送還される書類にサインをしました。

70年代、80年代のドイツでは、男社会を再生産し続ける母を告発し、母に対する娘の憎悪を意識化し、母性イデオロギーを解体しようとする作品が女性作家により数多く書かれました。コルネリア・エドヴァルドソンの本は、そういう母親告発とは少し異なります。しかしすべてを擲って子どものためにつくす母親、という神話を崩す物語であることはたしかです。母ランゲッサーの小説や生活のような、神秘化も自己愛的内面化もない、醒めた散文には、母と娘の眞の理解と和解を求める通低音が響いています。母の威力に脅える少女の幻想を描いたその人が、我が娘を前にすると、同じ威力をふるっていたという苦い現実。スキャンダルとは、娘を「売る」ことではなく、母性礼讃にあるのです。

4 アジアのキリスト教と女性

山野繁子

1980年代から90年代にかけての日本と他のアジア諸国での女性たちのつながりを経験する中で、私なりにキーワードとして心に留めてきたことがあります。第一に「同時代性」ということ。日本人のアジアの国々への感想として、「10年前、20年前の日本を思い出す」という表現が無邪気に言われることがあります。アジアの人びとからも「日本だって数十年前には人権が無視されるような状況が沢山あったではないか」という言葉を聞いたことがあります。そんな時、「私たちは同じ20世紀の最後の数年を生きている人間であり、しかも一方が他方を支配し、利用し、享受する関係に置かれている」ことを問題にしたいのだと考えてきました。

第二に、同時代に生きる私たちが「構造的暴力」の中にいること。対外債務の問題が、アジア、アフリカ、中南米の女性たちにとって、どれほど深刻に感じられているか、私たちがODAを問題にするときはまったく異質な苦悩であろうと思います。個人の意思を越えた世界の力関係の中で、その国が置かれた状況とその人が生まれた階層と性別によって、一人一人の生き方が大きく規定されていることを覚えていることが必要です。

第三にエンパワメントという言葉があります。「力付ける」という意味ですが、構造的・制度的に弱い立場に置かれた人びとが、自分たちの生活がなぜ貧しいのか、苦しいのかに気付き、それを理解し、自分たちの言葉で表し、その状況を変えていくために必要な力を付けていくことを意味しています。

今日のアジア各地でさまざまな形で女性たちのエンパワメントの活動が行われています。あるマニラのスラム地域の女性たちは、重症の栄養失調の子どもたちの給食活動を組織し、ある農村で女性たちは相互扶助のための共同組合作りを始めています。アジア各地に始まっているこのような自覚的な現状認識と現状変革の運動の多く

は、キリスト教との関わりをもって行われています。草の根の民衆教会、キリスト教基礎共同体、分ち合いの家などさまざまな名の下に、目立たない形で人びとの生活のただ中で希望と支えと連帯の芽を育ててきました。



一つの例として、香港に事務所を置くアジア女性委員会(CAW)について少しお話ししますと、このグループは1981年から、アジア諸国の女子労働者、組合指導者、女性組織のための共同学習、交流、情報交換、連帯活動、出版などのプログラムを少ないスタッフで続けてきました。それによって国を越えた労働者の経験交流がどれほど大切かということを、多くの人びとが学んできました。女性自身の気付きと力をとおして正義を求めるこのような運動が始められ、支えられてきた背景には、1970年代、80年代のキリスト教の(カトリック、プロテstantを含めて)動きがありました。

アジア諸国でキリスト教は長い間、植民者、支配者の宗教でした。あるフィリピンの女性は「キリスト教は16世紀に男性支配、スペイン支配、エリート支配の3つの呪いをもたらした。」と述べています。ところが1970年代から各国で盛り上がってきた民主化(いわゆる開発独裁に対する)運動の中で民衆と共に立ち上がって弾圧された人びとの間にキリスト者が含まれていました。女性のキリスト者が多く関わり、その人びとが聖書の読み直し、歴史の見直しを主体的に進めることから、アジアのキリスト教フェミニズムが形を取り始めました。1984年に、IN GOD'S IMAGEという季刊誌が発刊され、アジアの女性神学者の定期的な会合も開かれるようになりました。

伝統的なキリスト教信仰においては、男性が中心、女性は従うものでしたが、今女性たち自身がイエスの示された自由の意味を取り戻し、自分自身を肯定し、抑圧された人びとの痛みに気付き、そして連帯を作り出す力になろうとする動きが育ってきています。このことが、破壊されたアジアの人びとの生命と環境を真の意味で回復することにつながっていけることを願っています。

5 植民地政策と朝鮮人女性の苦難 —児童文学による少女ユ・グアンソン

イム ジヨネ
任 展慧

朝鮮の近代化は、日本の植民地政策に対する危機意識から始まった。1875年9月、日本は軍艦「雲揚号」の圧力で朝鮮に開港を迫り、翌年に江華條約を締結させた。以後、朝鮮は鎖国体制を維持することは不可能となった。日本は欧米列強に先んじて、朝鮮の開港に成功したのである。そして、日本の朝鮮侵略の準備は着々と進められていった。

1905年に乙巳条約の名のもとに朝鮮の外交権を剥奪し、翌年には統監府を設置した。もはや朝鮮は、名目だけの独立国家にすぎなかった。朝鮮人たちは政府に対して乙巳条約の廃棄を迫り、この条約に調印した李完用、李址鎞ら5人の大臣を、売国五賊とよんで批難した。反日義兵の鬪いが全国にくりひろげられた。それと同時に、自強自主による祖国独立への念願は教育へと向けられ、1905年から1910年の「韓日併合」までに3千余の私立学校が建てられた。1905年を境にして朝鮮の女たちは、救国運動の一つとして、女たち自身による女学校設立運動を各地で起こした。この





頃に結成された多くの婦人会の目的は、女学校後援に置かれていた。私立学校の教育内容は、国権回復をめざした愛国教育であった。当時の教科用図書のうち、張志淵の翻案小説『愛國婦人』は、ジャンヌ・ダルクの言動を通じて女学生たちに、男と肩を並べて国のために働くことをよびかけ、大きな影響を与えたといわれている。

この頃、朝鮮では日本から導入した「亡國借款」1300万円の返済をめざして国債補償運動が全国的にくりひろげられ、女たちは減膳会、脱環会などを組織してカンパを行った。いわば

近代朝鮮における女たちの社会活動は、祖国の植民地化を阻止する闘いの中から始ったといえよう。その愛国的姿勢とエネルギーは、1910年の「韓日併合」以後にも引き継がれた。

そして、それは1919年の「3・1独立運動」の際に、はっきりと示された。多くの女たちが示威運動に参加した。

1919年3月1日、ソウルのパゴダ公園において、学生たちによって「独立宣言書」が朗読されたあと、集った群衆は「独立万歳」を叫びながらデモ行進を行った。この運動は、またたく間に朝鮮全土にひろがり、参加者200万人ともいわれている。驚いた日本政府は憲兵、警察、軍隊を動員して、素手で行進する朝鮮人たちに武力弾圧を行った。朴殷植著『韓國独立運動之血史』によると、死亡した朝鮮人は7509人、負傷者15,961人、逮捕者46,948人、焼却民家715戸であった。「3・1独立運動」には多くの女学生たちが参加し、大きな役割を果した。その中の

人が「朝鮮のジャンヌ・ダルク」といわれる柳寛順ヨクワンスンであった。

柳寛順は1904年4月26日、忠清南道天安郡に生れた。父柳重權は私立学校を経営していた。兄一人、弟二人がいた。1916年4月、ソウルの梨花学堂（現在の梨花女子大学）に入学した。中等科2年生になるのを目前にひかえていた時、「3・1独立運動」がおきデモ行進に参加した。総督府は運動の波及をおそれ、各学校に強制休校を命じた。柳寛順は3月13日、故郷に戻った。故郷では、まだ独立万歳の声をあげていなかった。柳寛順は独立運動家たちと連絡をとり、市が開かれる4月1日を独立宣言の集会日とすることを計画した。当日、柳寛順は数千名の前で演説をし、デモ行進の先頭に立った。日本憲兵隊の発砲により、彼女の両親をはじめ30余人が殺された。彼女の家も焼かれた。柳寛順は首謀者として逮捕され、懲役3年を宣告された。上告審で「国を奪ったお前たちに私を裁く権利はない」と主張し、法廷侮辱罪を加算されて懲役7年となった。獄中でも抵抗しつづけたために拷問を受けて病氣になり、1920年10月12日、16歳で獄死した。

今年は柳寛順の生誕90周年、「3・1独立運動」75周年にあたる。そのせいであろうか、1991年から93年にかけて柳寛順のこども向けの伝記5冊がソウルで刊行されている。幼児向けのアニメーションのものから、中学生向けのものまで、幅広い層を対象にしている。だが、5冊に共通しているのは、植民地時代の体験を主体的に克服してゆこうとする姿勢である。日本を一方的に批難するだけにとどまつてはいない。いずれも、植民地化は国民に教育が足りなかつたこと、女も勉強しなくてはいけないことの2点が強調されている。若い世代に民族の誇りを語り継ぐと同時に、同じ悲しみをくり返すことのない方向が、しっかりと指し示されているのである。

AWACセミナー 第3期 講師紹介一

田村 雲供(たむらうんきょう)

同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。現在同志社大学文学部嘱託講師。論文「南西アフリカ、ドイツ領植民地への女性輸送—人種主義とセクシズムの実態」ほか。訳書『胎児へのまなざし—生命イデオロギーを読み解く』バーバラ・ドゥーデン著 阿吽社刊

松下 たゑ子(まつしたたえこ)

ドイツ文学、成蹊大学教員。著書『Rezeption der Literatur des Dritten Reichs im Rahmen der Kulturspezifischen und Kulturpolitischen Bedingungen Japans 1933—1945』(Verlag breitenbach publishers)

林 瑞枝(はやしみずえ)

フランス社会研究。著書『フランスの異邦人』(中央公論社)『人権という権利』(大蔵省出版局)。訳書『サラエボ日記』ライモンド・レヒニツァー著(平凡社)他

山野 繁子(やまとしげこ)

実践神学。アジア女子労働者交流センター、日本キリスト教協議会キリスト教アジア資料センターを経て、現在聖公会神学院教員。『総説実践神学II』(共著、日本基督教団出版局)『日本の神学の方向』(共著、新教出版社)、他。

任 展慧(イムジョネ)

日本近代文学研究。朝鮮問題研究会『海峡』同人。著書『日本における朝鮮人の文学の歴史』(法政大学出版局)。共同編集『金史良全集』(河出書房新社)『朝鮮文学選(1)』(三友社)他。

見られる・見る・見なおす—見なおし・つくり・かえる

文法・女からの3段活用

あい…そして私の中のアジア

澤田 伶子
(元 霞ヶ関官庁勤務)

結構長く世の中を見てきたつもりでいたけれど、三十有余年に及び霞が関人生にあって、仕事以外のことは何も知らない頭の固い人間が出来上がっていた。やっと自由な身分になって、さて何をしようか…。ふと目についた「女性学講座」、一体何を学ぶのかと早速受けて見る気になった。まあ、その驚いたこと、「目からうろこが落ちる」とはこのことであった。今まで女性だからといって、特に困ったこともなければ、いやな思いも、はたまた差別をされたと感じたこともなく来たものだから、全く気づかずにいたけれど、女性は、この長い歴史的家父長制の下で、社会構造的に、重層的に、差別される側に組み込まれていたのだと知らされた。いま振り返ると、男性社会と言われている中で、差別をさせないように過剰防衛していたなあと。男性ならば、二日酔いでと笑ってます小さなミスも、女性には許されない。談笑しながら居残り仕事ができる男性軍を、目のはしに羨みつつ、子どもたちの待つ家へと走り、深夜に自宅残業の日々…何の疑問も持たずに、女性役割、ケア役割を引受けたことを知らされたのであった。現在、女性問題の存在すら知らなかった以前からすると、ものの見方、考え方の視点が、確実に違ってきたことを感じている。

そんな日々のなか、縁あってAWACセミナーを知っ

た、情熱をもって、女性の目でアートを語り、フェミニズムを論じ、それらをアジアの中から深めていくという、今までまったく知らなかった世界の女性たちに出会うことができた。

アジアという言葉の響は、わたしにはるかな郷愁を呼び起こす。戦前、旧満州国に生まれ、中国で育ち、終戦時に、北京のやや北東、張家口市から引き揚げ帰国した。そのとき、ほんの紙一重の運のよさで残留孤児にならずにすんだ。そして、当時それとは知らず、日本の植民地支配のさまを垣間見て育った故か、未だにこだわりを持ち続け、中国に行くことができないという、潜在、戦時体験のジレンマから抜け出すことができない。近年、数学者である夫は、向こうの教育関係者と行き来をするようになった。彼らは、私のことを知って、過去の出来事はあなたに責任はない、ぜひ一緒に来るようと言つてくれたという。しかし、一そうですか、それならば一、と割り切つていいものだろうか。子供心に焼きついた原風景、そこにしっかりと被支配者の悲しみを見てしまったのであった。そして歴史を学ぶなかで、日本人が彼の地で犯した大いなる罪を知らされた。このことは、日本生まれ日本育ちの夫には、なかなか理解してもらえない。

今、戦争を知らない世代が、また、向こうに思い出をもつ多くの人々が、彼の地に出かけていく。

人は、悲しいこと、辛いことを忘れなければ生きては行けない。しかし、痛みは、受けたほうに大きく、与えたほうは忘れやすい。私たちは、いつも、そのことをしっかりと心に刻んでいかなくてはならない。

戦争50周年記念企画 1995年4月～10月(予定)

富山妙子 東京・ソウル展 —戦争責任を問う 遠い風景から射す影に—

■新作「20世紀へのレクイエム・ハルビン駅」シリーズ

日中戦争が第2次大戦へと拡大してゆく時代、ハルビンで、あるいは釜山で見た光景は、私の胸に刻まれた原風景である。戦後になっても、原風景から射す影がずっと私につきまとう。せめて一画家の私にできることといえば、忘却のなかに消されようとしている戦争犠牲者の生の痕跡を引きよせることくらいだ。

富山妙子

富山妙子さんは、日本の戦争責任、戦後責任を問う作品で知られ、みずからを含む時代と社会を繋ぐ表現者として広く国内外の支持を得てこられました。私たちは来年、戦争50周年という年に、富山さんの作品展を東京とソウルで実現させたいと考え「アジアへの視座と表現」実行委員会を結成いたしました。是非とも皆さまのご協力をお願いいたします。

代表世話人 萩原弘子

■映像作品 音楽 ■高橋 悠治 撮影 ■原 一男(疾走プロ)

主催／「アジアへの視座と表現」実行委員会 事務局 03-3226-7396 FAX 03-3226-7397
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-2-3 エルビラ101

AWAC特別セミナー 第1回 5月21日 東京芸術劇場会議室

“20世紀を見るもうひとつの視線”より

■ブルターニュのゴーギャン：タヒチ以前のトゥーリズム——萩原弘子

画家がキャンバス上に描いた像と、その画家や作品について記述する美術史、美術評論は、ともに手を携えてわれわれのものの見方をつくりだしている。一つの顕著な例がゴーギャンである。タヒチという場所についてわれわれが現在もっているイメージは、ゴーギャンの作品とそれを解説する美術史の記述抜きには考えられないのではないかだろうか。ゴーギャンのタヒチ一楽園幻想と植民地主義については、いざれどこかで詳しく論じるつもりだ。今回は「プリミティヴィズムの父」ゴーギャンがタヒチ以前に通ったフランス北西部ブルターニュで、彼（及び、ポン・タヴァン派の仲間の画家たち）がブルターニュに注いだトゥーリズム（観光旅行的、物見遊山的姿勢）の視線を検討したい。タヒチの女性に注いだ植民地主義的視線は、早くもブルターニュすでに準備されていた。

「野生の辺境ブルターニュ」という固定的イメージはいまだに強い。1979年にロイヤル・アカデミー（ロンドン）で開かれた『ポスト印象派』展カタログは、ゴーギャンとポン・タヴァン派のブルターニュ作品を解説するなかでブルターニュを次のような土地としている。「パリからの遠き、厳しい気候、貧しい地質、そして経済的後進性のために、ブルターニュの特徴と言えば、極端な貧困、常軌を逸した信心、説明のつかない迷信、運命論的な諦めである。不毛で荒廃とした風景、伝統的な民族衣装をつけた古風で信心深い女たち、貧困と反文明の地ブルターニュというのが、ゴーギャンとポン・タヴァン派を通して伝えられるブルターニュ像である。

パリとの経済格差がある上に、ケルト系の言語、文化の地ブルターニュは、19世紀末のパリの画家たちの辺境幻想を大いに刺激した。古典教養重視のアカデミズムに反抗して都市ブルジョワジーの生活を描いた印象派に対抗して、ゴーギャンは次の時代の前衛の先頭たらんと、やまっ気たっぷりに新奇の素材を求めていた。都会的洗練にたてつき、荒々しき原始を表現するにはブルターニュは手頃な「辺境」だった。ゴーギャン自身、次のように言っている。「私はブルターニュを愛す。そこには野蛮があり、原始がある。私の木靴が花崗岩質の地面の上で響くのを聞くと、そのくぐもりのある単調で力強い音こそ、絵にしたいものだと思う」。1880年代に彼がブルターニュに通った理由を、友人のモンフリが説明しているのも似たようなことだ。「彼はこの過度に文明化した社会を離れ、違う環境を見つけようと思って、古い風習がそのままの国を求めた。彼は自分の作品を原始美術にしたかったのだ」。

しかし、当時のブルターニュの現実は違っていた。1840年代以降ブルターニュでは大規模な農業改革が進み、80年代にはすでに40万haの耕地拡大を果たしていた。牛肉や野菜をフランス各地に供給し、輸出作物としてのジャガイモ産地として成功したブルターニュは、経済専門家が「フランス国内で明るい未来を予測できる随一の地域」とまで言わされた。「荒廃とした貧しい農地」をとぼとぼと農夫が行く光景などと説明されるポン・タヴァン派の作品に描かれている畠は、実は近年の労働がつくりだしたものであり、当時、世界市場制覇を狙うフランス国家が推進していた農業政策の現場なのである。

また、ゴーギャンと他のポン・タヴァン派の画家が、「辺境ブルターニュ」ならではの光景、貧困と野生と神秘の光景として好んで描いたのが、海草採りの女たちである。1979年の展覧会でも「海草採りはブルターニュの未開性の表われ」と説明されている。しかし海草採りは貧困の証ではなく、農業用肥料としてのヨード製造に不可欠な産業で、それは20世紀半ばに化学肥料が登場するまで続いた。当時採取者は、採取時間、採取人数、海草の種類などに関する厳しい法的規制のもとに置かれ、採取労働は組織化されていた。

ブルターニュの民族衣装をつけた女も、ゴーギャンはブルターニュの古い伝統の証として数多く描いている。作品に描かれている、野良や海辺で働く女たち、教会や戸外で祈る女たちが着けている特徴的な頭巾とエプロンは、異国情緒あふれる伝統的衣装と見える。しかし民族衣装の発達は、19世紀ブルターニュにおける新興農業ブルジョワジーの形成と不可分の新しい事態である。18世紀末の大革命は、階級による衣装の色、素材、形の規制を撤廃して服装の自由を民衆にもたらした。その後、ブルターニュでは地域や一族ごとに服装のヴァリューションを発達させ、19世紀半ばともなると、富裕な新興農業ブルジョワジーが登場して、家格や財力の誇示のために贅を競うようになり、世紀末には、頭巾だけでも1200の型があったと言われている。

民族衣装の発達は、他方で、当時のブルターニュ・ナショナリズムとケルト文化復興運動の興隆とも関係している。パリの中央政府は、無宗教教育の法制化を推進して、教育事業の分野から教会勢力を駆逐すると同時に、全国一律にフランス語だけで教育する体制を整えつつあった。ブルターニュのブルトン語が、アルザスやプロヴァンスの地域語と同様、撲滅すべき二流の言語のように言われるなかで、ブルターニュのカトリック教会はブルトン語で説教をし、ブルターニュ的なるものを擁護した

ので、人々のあいだには熱心なカトリック信仰のリバイバルが起こった。ゴーギャンやエミル・ベルナールはブルターニュを舞台にキリスト教テーマの作品を描いているが、彼らがブルターニュの信仰熱心を反近代、反文明、伝統墨守の純朴さからくるものと理解したのはおかど違ひである。フランスの近代国家形成の過程で破壊されかねない自分たちの文化を守ろうとする動きのなかで、民族衣装に人気が集まり、カトリック・ブームが起ったのである。

ゴーギャンたちが訪れた頃には、すでにブルターニュはパリ経済圏内に組み込まれていた。観光事業が振興された結果、いくつかのアーティスト村ができておらず、前衛志向のゴーギャンとはおよそ違う、アカデミズムの系譜に連なる画家たちも、珍しい風習と生活費の安さに魅せられて各国から集まっていた。ゴーギャンも例外ではない。

トゥーリズム(観光旅行)とは、自分の文化とは違うものを求めて遠くへ出かけるという、都市住民の新しい行動であり、その流れのなかでアーティストたちも「辺境」を求めて出かけていった。トゥーリズムは人を真剣な観察者にはしない。トゥーリストは、遠くの他者に自分が期待するもの(たとえば、原始や伝統、異国情緒)しか見ない。それが姿勢としてのトゥーリズム(つまり物見遊山的態度)である。問題は、そういう姿勢でつくられた作品が、今度は、「野生の辺境ブルターニュ」というイメ

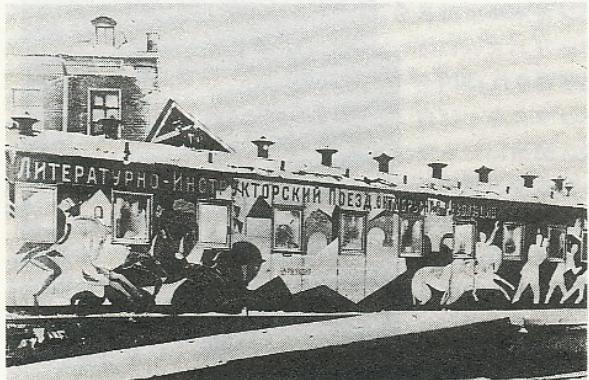
ージを人々のなかに積極的につくりだすことである。そのイメージは数十年にもわたって繰り返され、ブルターニュが、複雑な社会的、経済的、政治的、歴史的、文化的な諸要素が絡み合って常に生成変化する場所であることを見えなくする。ブルターニュの風俗に異国情緒をかきたてられはしても、異文化を叩き潰そうとするフランス国家の文化一元主義政策の現実は見えず、それに対するブルターニュの抵抗に歴史があることも見えない。こうして美術作品は、現実をつくりかえて人々に見せる力をもつ。ブルターニュを「野生の辺境」につくりかえたゴーギャンは、やがてタヒチでも同じことをすることになる。

美術史はゴーギャンを、モダニスト・プリミティヴィズム画家の理想モデルとして記述してきた。冒険、放浪、反都市文明、楽園幻想、非凡さの証としての稚氣、傍若無人、伝統破壊、内なる野蛮、創造力の証としての好色など、芸術の前衛を追求する芸術家はこうあるものというあらゆる徳目が、ゴーギャンについて言われてきた。これらはどれも男性的な徳目であり、これらの徳目を満たす女というのは考えにくい。私がフェミニストとしてしたいのは、ゴーギャンの好色や不道徳を指摘することではなく、そうしたことでも芸術家の創造性の証として評価するような男性中心的な芸術家像を具体的な歴史的、社会的な場所に位置づけて、その像の意味と機能を明らかにすることだが、それは次の仕事にしよう。

■ロシア・アヴァンギャルドと女性画家 ——富山妙子

1979年パリのポンピドー美術館で「パリーモスクワ1900~1930」展が開かれ歴史の間に葬られていたロシア・アヴァンギャルド美術が姿を現わした。82年私がパリに行ったときもその余波はつづいており、ロシア革命初期の仕事が続々と紹介され、フェミニスト・ギャラリー“デ・ファム”ではロシア女性画家の展覧会が開かれ、表紙にあるような20年代初めのコスチューム・デザインが復元されていた。フランス経由の情報にとびつく日本では西武美術館で二度のロシア・アヴァンギャルド展となり、原宿のファッショングループにまで反映するほどの人気だった。

ロシア前衛芸術(アヴァンギャルド)を簡単に説明すると、



▲宣伝列車

20世紀のはじめすでに印象派の時代は終り芸術のあり方を問いつぶて運動がおこってきた。ローマやルネサンス美術の伝統をもつイタリアでおこる未来派は「ギリシア・ローマ彫刻より機械の方が美しい」という美の視座の変革



▲アレクサン德拉・エクステル(1882~1949)を提起した「未来派宣言」(1910年)が出された。その未来派にもっとも共鳴したのがロシアの若い芸術家たちだった。ツアーリの専制政治、ギリシア正教の権威にみちた装飾過剰、支配階級のフランス・ブルジョア趣味にへきえきしていた若い芸術家たちは新しいグループ活動をはじめ、未来派文集「社会の趣味への平手打ち」や「ロバの

の尻っぽ」などを結成。まもなく第一次大戦となり、周知のような1917年のロシア10月革命となったのである。

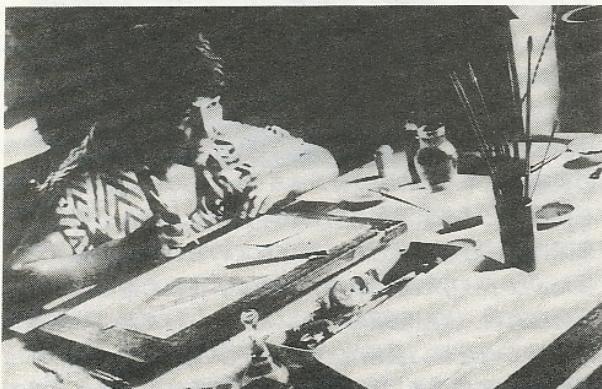
地上ではじめて出現した社会主義国家ソビエトの誕生に古い芸術家は茫然自失、そこでアウトサイダーだった未来派や新しい芸術運動をしていた人たちが、国家的規模での美術行政を担うことになった。未来派詩人のマヤコフスキイは革命を民衆に知らせる情報として『ロスターの窓』(タス通信の前身)で画家を集めてポスターを制作。画家カンディンスキイも美術行政官であり、シャガールはヴィラブスクの美術学校長として活躍。

メーデーや革命記念の祝祭イベントは前衛美術家や美術学生たちの手で、クレムリン宮やペトログラードの冬宮も権威的なものから市民的なものへとイメージ・チェンジされ、まるで中世のカーニバルのような親しみをもつ祝祭空間に代えられた。都市のなかの権威的な銅像は撤去され、アブストラクトの彫刻に代えられてゆく。

新しい絵画表現のひとつに宣伝列車や宣伝船があり、画家たちが共同制作で列車の車輌に絵を描いた。とくにコーカサス仕立ての列車は人気があったそうで、美しい絵を描いた列車が広大なロシアの原野を走り、新しい社会がきたことを告げてゆく、この宣伝列車は民衆に人気があったそうだ。そうした美意識の革命を見て頭をかかえこんだのは、政治革命を長年してきたレーニンをはじめ革命闘士たちだった。

美術の中心といわれたフランスでも女性画家の出現が困難だった時代、ロシア・アヴァンギャルドのなかには驚くほど多くの女性画家が参加し、活動している。それについて思い出されるのが19世紀の豊饒なロシア文学の伝統で、そこには魅力的な女性たちが登場してくる。特權階級の出身の知識人が心を痛めたのは農奴のような農民の生活だった。詩人ネクラーソフは「奴隸によって作られたパンは苦い」とうたった。現代でいえば「第3世界の収奪の上になりたった生活は苦い」というところだろう。彼らのなかから民衆の中へ入ろうという「ヴ・ナロード」の運動がおこった。知識階級の女たちも時代とともに大きく変わりはじめていた。

19世紀末、すでにロシアの諸都市に美術学校があり、そこで女たちも学び、20世紀になると未来派の運動に参加し、男性に交じって多くのグループに所属していた女



▲ワルワラ・ステファノヴァ(1894~1958)

性画家がすでにいたのである。革命によって未来派が登場し、女性たちもいろんなプロジェクトに参加し発表の場が充分に与えられてきた。すでにジャンルの壁はとっ払われ、画家たちはタブロー絵画の世界を出て、市民社会のなかに表現の場を見出していた。



リュボフ・ポポワ(1889~1924)▲

「社会の趣味へ」の平手打ち」グループのナタリア・ゴンチャロヴァは、パリで活躍するディアギレフのロシア・バレー団に招かれてコスチューム・デザインを担当。リュボフ・ポポワは、メイエルホリドの演出の「堂々たるコキュ」の舞台装置を担当。アレクサン德拉・エクスラルはカメヌイ劇場の舞台に立体派と未来派を合わせた構成的な装置を制作というように、その他めざましい活躍をする多くの女性画家たちがいる。

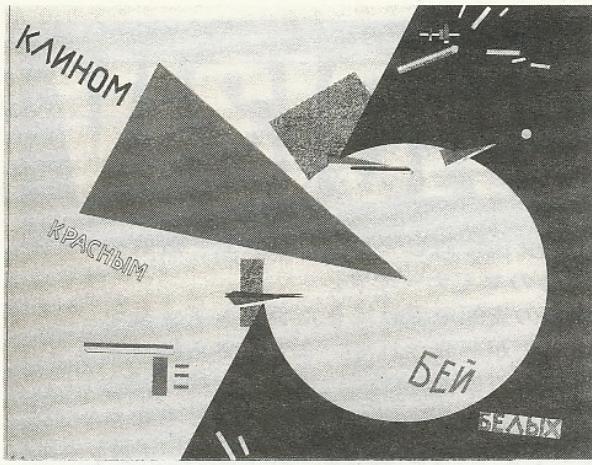
映画監督のエーゼンシュタイン、作曲家のショスタコヴィッチ、詩人、エセニンやマヤコフスキイのいるロシア芸術はこのままゆけば、20世紀美術の発信地となつたであろう。しかし政治と芸術の密月は長くは続かなかった。外国からのソビエトへの圧力、党内闘争の激化が深まり、24年にレーニンが死去すると実権はスターリンに移ってゆき、29年にはトロツキーの国外追放となる。そしてロシア・アヴァンギャルドに代って「革命ロシア美術協会」が結成され、抽象と写実の抗争の時代を経て「社会主義建設の輝やかしい目撃者、証人」としての社会主義リアリズムの路線が勝利した。

ロシア・アヴァンギャルドを現代の目で見ると、芸術が市民のなかで息づき始めた美の民主化といえる。しかし早すぎた美の革命を当時の人びとは理解できず、短命に終ってしまった。ロシア・アヴァンギャルドはスターリニズムによって消され、30年マヤコフスキイは自殺。33年、ヒトラーが政権を掌握し、やがてファシズムの時代となり、第2次大戦へと突入してしまった。

一方メキシコに亡命したトロツキー



▲ナタリア・ゴンチャロヴァ(1881~1962)



▲エル・リシツキー「赤きくさびで白を打て」1920年

ーは、画家リベラ、妻のフリーダ・カーロに迎えられた。そこへフランスのシュルレアリズムのイデオローグ

であるアンドレ・ブルトンがやってきて「もういちど美術を一からやり直そう」と「独立革命芸術国際連盟に向けたマニフェスト」を発表。しかし40年8月、トロツキーはスターリニストの画家、シュケイロスが首謀したとされる暗殺團に襲われ殺された。

戦後は米ソ冷戦構造の対立からはじまり、ソビエトの社会主義リアリズムに対抗して、アメリカはアブストラクトを選択。各国の共産党はソビエトに気を配り、ロシア・アヴァンギャルドの存在を葬っていた。アメリカはスターリーンやヒトラーに追われたアーティストを抱え込み、文化的にも霸権を握ることになった。このようなことから芸術がいかに国家や政治権力によって支配されるかがうかがえる。消されたロシア・アヴァンギャルドの中で、さらに女性は消された存在だった。歴史の真実を知るのにはずいぶん時間がかかるものだ。

AWACセミナー 第5期 1995年1月~5月予定

アジアと女と表現

- ◆1月 東洋美術のなかの周縁—民衆の表現・女の表現
■富山妙子(画家)
- ◆2月 アメリカのなかのアジア—女性アーティストによる表現
■レベッカ・ジェニソン(京都精華大学教員)
- ◆3月 ジャーナリズムと女性—アジアと女性への報道
■松井やより(ジャーナリスト)
- ◆4月 戦争を振り返る—日本を見るアジアの視線
■内海愛子(日本アジア関係史・惠泉大学教員)
- ◆5月 もうひとつの住い方・チャレンジシティ
■渡辺喜代美(建築家)

AWACセミナー 第6期 1995年6月~10月予定

戦争50周年記念

- ◆6月 「ゆきゆきて神軍」をプロデュースして
■小林佐智子(疾走プロ代表)
- ◆7月 ドイツ・画家と戦争責任
■浜田和子(美術史研究・在ベルリン)
- ◆9月 戦争・女性と民族—ハンナ・アーレントについて
■志水紀代子(哲学・追究門大教員)
- ◆10月 戦争と音楽
(交渉中)
- ◆11月 朝鮮統治政策と日本文学
■任展慧(日本近代文学研究)

Visions International (英語・日本語バイリンガル) この秋刊行!

世界に向けて発信するヴィジュアルなフェミニスト・アート・ジャーナルの第1号の特集は「女と戦争」。特集記事は、戦時下の日本の女の加害者性に迫る嶋田美子の版画作品について(Leza Lowitz執筆)、富山妙子のハルビン・シリーズについて(Rebecca Jennison執筆)、イラン人映像作家ミトラ・タブリジアンについて(萩原

弘子執筆)、トルコ人作家アザーデ・キヨーカー(浜田和子執筆)など。他に、東京都写真美術館の笠原美智子が論じる石内都の写真、花柳幻舟を撮ったイギリスのドキュメンタリー映画についてなど。ほかにはない視点の評論、書評が満載です。スタッフは、ただいま汗かい作業中。24頁。図版多数。

■8月末
刊行予定

『美術史を解きはなつ』 価格は未定

富山妙子・浜田和子・萩原弘子 共著

富山妙子、浜田和子、萩原弘子の3人が、それぞれの視点から美術史、芸術観を問い合わせる。画家としてアジアに視座を据えるまでの苦闘を振りかえる富山妙子。ベルリンで冷戦時代の東西ドイツを見てきた浜田和子は、

壁の崩壊とその後のドイツ美術の状況を独自の視点で切開する。萩原弘子はオリエンタリズムとプリミティヴィズムを論じ、特権の集中をつくりだす現場としての美術史研究を批判。

時事通信社

〒100 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル3階
電話 03-3501-9855・9856

AWAC・メッセージ

フェミニズムの思想を、アジアの中から深めようということからセミナーを企画いたしました。アジア、フェミニスト、そしてアートのどれひとつをとってみても、検討を迫られているむずかしい課題です。

まず西洋中心の近代文化に対してアジア、男性中心文化に対してフェミニズム、既成の「芸術」に対して現代アートの創造を討論し考えるためのセミナーです。

早くからヨーロッパの植民地となり、西欧中心文化の支配を受けてきたラテンアメリカや、アフリカからはアイデンティティを問う思想や文化が形成されています。さらに「コロンブス五百年祭」を迎えたアメリカ大陸の先住民族からは、先住民殺戮の上に成り立った白人文化のあり方が普遍といえるのか、ようやく問われる時代となりました。こうしたうごきの中で、皆さんと一緒に新しいヴィジョンをつくるため、ご参加をお待ちしています。

VISIONSニュースレター 創刊号

1993年8月発行

特集・オリエンタリズム

- ①アジアとオリエンタリズム・岡倉天心へのとまどい…………富山妙子
- ②オリエンタリズム—他者を位置付ける視線について…………萩原弘子
- ③近代日本のジェンダー・イデオロギーとアジア…………大越愛子
- ④オリエンタリズム再考—アジア系アメリカ人女性アーティストによる自己表現…………レベッカ・ジェニソン
- ⑤都市と建築を問う—生活者の視線…………渡辺喜代美

VISIONSニュースレター 2号

1994年1月発行

特集・アジアと多様な女の文化

- ①マレーシア・イスラム文化と女性…………中原道子
- ②中国と女性の文学から…………田畠佐和子
- ③台湾先住民への政策“サヨンの鐘”考…………中村ふじゑ
- ④タイ・近代化と女性…………莊司和子
- ⑤アジアと日本の関係性…………松井やより

VISIONS INTERNATIONAL ■この秋刊行予定■ 英語・日本語 バイリンガル

□日本から発信するヴィジュアルなフェミニスト・アート・ジャーナル

◆講読料(年) 3,000円

編集後記

●お知らせ：セミナーの参加者でお話を聞きのがした人にテープを貸し出しております。ぜひご利用下さい。担当の田辺さんまでお申し出て下さい。

●VISIONS第3号もやっと出来ました。7月のセミナーに発行しようとしたため、時間が少なくてぶん多少のミスがあるかもしれません、お許し下さい。

●テレビのニュースや新聞紙上で、朝鮮人学校女生徒へのいやがらせやチマチョゴリが切られたりする事件があいついで報じられています。いったい日本の当局は何をやっているのだろうか。国際化と叫びながら、いまもって朝鮮人や外国人に対する日本人のそうした心のありように怒りをおぼえる。しかし、こうした状況に対して女性の市民団体が「チマチョゴリへの暴力を許しません！」というバッチを作り反対運動をしています。私の手元にもバッチがありますので、おわけします。300円ですので、皆さんもバッチを付けてこうした状況は許さないと意志を表して下さい。

(須田)

AWAC・特別セミナー 第2回

音楽表現と性差

1994年11月 予定 東京芸術劇場 会議室
(JR・地下鉄「池袋」駅西口出口1分)

■女性の作品を聞きながら——小林緑(国立音楽大学教員) その他

主催・AWAC お問い合わせ／世田谷区桜丘4-16-2 ☎03-3425-6095 富山まで



17世紀の女性作曲家バルバラ・ストロツィ